

〔グローバル教育〕

長岡大学初の海外インターンシップの試み

中 村 大 輔

（長岡大学専任講師）

2011年8月、長岡大学中村ゼミナール所属の3年生3名が中国の深圳にある「テクノセンター」¹で行われたインターンシップ研修に参加した。

テクノセンター日系中小企業の中国進出をさまざまな面からサポートする企業であり、現在そのサポートの下で数十社が深圳で操業している。

私がテクノセンターを知るきっかけになったのはtwitterである。一昨年夏に当時の3年生を香港と深圳にゼミ研修旅行として連れて行くことになり、twitterでつぶやいたところ、ある大学の先生からテクノセンターをご紹介いただいた。その時は半日見学をさせていただいたのだが、「ここでの研修は学生が成長できる」と直感できたぐらいの衝撃を感じた。

そこで本年度の3年生に対しては、テクノセンターでのインターンに参加したいという学生を募集した。その結果3名が本学から研修に参加することになったのである。

学生のレポートにもあるが、テクノセンターのインターンシップは決められたプログラムがない²。参加者各自で研修計画を作り上げ、その計画に基づいて二週間を過ごすことになる。これだけでも、今まで自ら動くということをしてこなかった学生にとっては厳しいだろう。さらに、二週間の研修期間を過ごすのは各社の工場で働く中国人工員の寮である。筆者は外国で安宿に泊まることもあるが、それと比較してもかなり厳しい環境である。こうした大変厳しい環境に自ら身を置く事は、耐える力を養うだけでなく、環境や文化の多様性を受容する心をも成長させるだろう。こうした筆者の直感を信じてくれた学生が研修に参加することになったのである。

研修から帰国した学生と話していると、直感は実感に変わっていった。特に3人のうち1人の学生は、極度の緊張から当初の一週間は体調を崩していた。かなり弱音も吐いていたようだが、（日本での生活に比べて）過酷な環境の中、自分で克服し最後は楽しんで帰ってきたのである。仲間もたくさんできたようだ。

「学生が海外に出ない」と言われて久しい。本学においても状況は変わらない。しかし、少しずつではあるが芽は伸びてきているように感じている。昨年末、平成24年度のゼミ生を募集するに際し、今回の研修に参加した学生に研修について話してもらった。2年生の志願者は彼らの話が心に残ったようである。教員よりも、学生が同級生や後輩に話してくれることの方が効果がある。

新しいことに挑戦するという事は心躍ることもあるが、その一方で不安もある。いや、不安の方が大きいかもしれない。しかしその不安を乗り越えて、様々なものを持ち帰ってくれた開拓者精神溢れる我がゼミ生3名には心から感謝している。

なお、本研修の参加に関して、長岡市国際交流協会の「青少年団体の海外派遣事業助成金」の交付を受けた。ここに記して感謝の念を表明する。

¹ <http://www.technocentre.com.hk/>

² <http://www.technocentre.com.hk/internship.shtml>